

研究ノート

華北農村の家族制について

——同族的結合と家族構成の数量的考察——

町 田 是 正

※各節に設けた註記は本文の内容を資料的に補足するとともに、筆者の主張が披瀝されているので、努めて註記を参照せられたい。

一、問題提起と研究領域（本文略）

本節は紙数の関係上、そのアウトラインを箇条書に列記し、筆者の意図するところを披瀝するに止めたい。

(一) 中国家族の歴史的型態には、家族共産型（同居同財・同居同爨・経済的家族とも呼ぶ）と同族的家族（宗族的家族・祭祀家族・宗教的家族とも呼ぶ）の二型が代表的であること。(二) 家族型態の起源は周代の父権的氏族社会の——殊に上属階級の血縁的シンボルとしての姓の組織体系たる——宗法に基づく祖先祭祀によって形成されたこと。(三) こうした歴史的家族型態を土台としながら、解放前夜の華北農村社会の家族制度を——殊に同族的・家族構成の問題を数量

的立場から——考察すること。㉒本論文は東京大学史学会委員会の教示に基き、家族制度を通して農民の封建的意識を浮きぼりし、近代的意識と対比すること。㉓今日、中国農村の家族制度は分析解明を最も要求されている焦眉の課題であり、そこには幾多の研究領域が横たわっている。家族制度の個々の具体的現象の科学的分析こそ、何が封建的で何が近代的なのかという問題の把握への道となるのである。

二、同族的結合^①と分布状態

華北農村における家族制度を研究するに当り、まづ家族の外延を構成する同族の結合と分布の実態について調べておきたい。即ち、同族的結合の実態を把握することは、㉔制度と思想としての家族制度。㉕土地制度及び村落との関係。㉖同族的結合に於ける団結及び族長の支配権の様相。㉗同族の社会的機能。などの諸問題を論究すべき基礎的資料を提供するものである。

従来、中国における同族的結合の強さは、華中・ことに華南に著しいとされてきた。^②つまり、同姓の比重の大きい村落は、清代末期または近來の状態からいえば、華中華南殊に華南の農村に多いとされてきたのである。

然しこれに対して、結合分布の比率が弱いと思はれる華北に於ては如何であらうか。たしかに華北では、華南に見られるような稲田の代りに小麦と高粱の畑に点在する同族共同の始祖を祭る祠堂（宗祠）には、美麗に修理されたものは悉く見られない。と云っても、同姓（同族）村落が絶無ではないし、同姓の比重が大きい場合がないではない。

ただ数量的に華北農村では同族的結合の比重がむしろ少いことである。^③従って結合分布の度合を、一律に平均して把えることは失当である。即ち、華北農村の同族的結合の分布状態は、可能なかぎりそのニュアンスを把えるよ

う努力すべきである。

先に見たように、華北には同族的村落が絶無ではないが、また同族（同姓）村でない村も多く、村落民の姓も職業も様々である。④従って、同族結合の強弱の度合は、各村落が共に平均的でないことは云うまでもない。李景漢氏による河北省定県の村落調査の結果を参考にすると、⑤同農村の同姓の比重は華中華南農村に比して小さい傾向にあるが、華北農村としては、それ程小さい方ではない。にも拘らず定県六十二カ村の内、同姓村落は一カ村を数えるのみである。

こうした傾向は華北農村慣行調査（調査主任杉之原舜一氏）によって明かとなった河北省欒城県の場合も定県と同様の状況を示している。また河北省順義県の場合は同姓（同族）の比重はこの両県より小さく、華中華南の農村と対比して最も特徴的な状況を示しているようである。

今この欒城県（全五区——県城内を除く）百四十三カ村の村落構成から、煩瑣ではあるがその一部を掲出して参考としてみたい。

第一表 河北省欒城県の村落構成 ⑥					
（全五区の中県城内を除く一四三カ村の内三十五村を例示）					
村名	総戸数	総姓数	最多姓と戸数	同上百分率	
北 関	二〇三	五〇	王 五三	二六・一	次多姓と戸数
撰 家 荘	二四三	二三	撰 一八八	七七・四	張 二二
小任家荘	八八	三七	張 九	一〇・三	董 一〇
孟 家 園	六六	五	孟 六二	九二・九	〔武六〕 李六
					〔趙一〕 侯一
					同上百分率
					一〇・八
					四・一
					六・八
					一・五

王 宋 彭 北 前 濤 康 圪 溫 范 寺 內 梅 吳 魯 西 南 寺 張 城 王 北 南 韓
 家 家 家 趙 牛 陽 家 塔 家 台 北 宮 家 郭 家 董 浪 下 家 郎 宮 浪 南 南 家
 村 莊 莊 村 村 村 莊 頭 莊 村 柴 村 宮 村 村 莊 村 頭 路 路 路 路 莊 莊

二五八 九七 一四一 九一 一七 一四五 六四 二一三 一九四 一七七 一四一 七九 三三三 二〇〇 八七 一〇〇 一一三 二九 七六 二四〇 六〇 一〇七 一七〇 一〇七

一三 一七 七 二 三 六 二 一〇 二 一 一〇 七 二 二 一 一 五 四 二 五 一六 三 五 四九 一五
 (不明) (不明)

郝 宋 次 趙 劉 馮 劉 王 溫 檀 郝 王 武 劉 魯 李 馮 董 張 張 趙 婁 王 韓

八三 九七 七八 五五 二二 一三六 六一 七八 一三 一三一 五二 三三 九〇 八一 三〇 九五 一〇七 二八 四七 一二〇 五三 六四 二一 五四

三二 一〇 五五 六〇 一八 九三 九五 三六 五八 七四 三六 四一 三〇 四〇 三四 九五 九二 九六 六一 五〇 八八 五〇 一二 五一
 二〇 〇 三 四 八 三 六 三 〇 八 〇 五 四 六 五 八 〇 三 五 三 九

喬 李 劉 史 劉 李 李 楊 孔 徐 劉 宮 候 趙 崔 薊 梁 皓 劉 劉 園 孔 趙 焦

七八 二七 二二 二〇 四 三 七六 三一 二一 二二三 一二 八三 四四 一九 二 四 一 一八 五五 六 二一 一七 一八

三〇 一九 二四 一七 二 四 三五 一六 一一 一六 一五 二二 二〇 二一 二 三 三 二 二〇 一〇 一九 一〇 一六
 四 一 二 一 八 七 〇 九 三 二 五 〇 八 〇 五 四 六 八 〇 六 〇 八

寶 廻 村	五九〇	四六	梁	九三	一五・八	賈	七三	一二・四
八 里 莊	六八	二	李	六七	九八・五	王	一	一・五
北 油 通 村	一四三	六	裴	七三	五一・〇	董	五一	三五・七
蘇 邱 村	一九五	五	崔	一九一	九七・七	〔孫一〕	陳	〇・五
治 河 南 村	一二六	一五	張	四四	三五・七	陳	二〇	八・八
東 佐 村	二五二	一一	張	二三一	九一・七	馮	四四	一・六
前 崗 頭 村	一〇六	六	郭	一〇一	九五・三	〔伊一王〕	檀一	〇・九
						〔申一段〕		

礪城県の村落（県城内を除く）百四十三カ村の内、純粹に同姓村落といわれるのは宋の一姓で九七戸を以て構成される宋家莊の一村のみである。また村落総戸数の内、一姓を以て九割以上を占めるのは次の十カ村を数える。――孟家園六十六戸の内孟姓六十二戸。寺下村二十九戸の内董姓二十八戸。南浪頭路南百十二戸の内馮姓百七戸。康家莊六十四戸の内劉姓六十一戸。濤陽村百四十五戸の内馮姓百三十六戸。西董舖村百戸の内李姓九十五戸。八里莊六十八戸の内李姓六十七戸。蘇邱村百九十五戸の内崔姓百九十一戸。東佐村二百五十二戸の内張姓二百三十一戸。前崗頭村百六戸の内郭姓百一戸これである。――第一表に例示した三十五カ村落以外には九割以上を占める最大姓戸数は見当らないのである。そして全五区村内の最大姓の戸数が九割以上を占める圧倒的な比率を示さなくとも、同村内戸数の半ば以上を占める村落は同県内総村落百四十三カ村の内、四割二分の六十カ村である。（第三表を参照）

この礪城県に対して順義県の場合には対比さるべき諸点に大きな差異が見られる。

第二表 順義県の村落構成

⑦ 順義県第一区五十四カ村の内、二十二カ村を例示総戸数。百分比は筆者の算出による。

村名	總戶數	總姓數	最大姓と戸數	同上百分率	次大姓と戸數	同上百分率
大東庄	一四六	三〇	趙 二	一五・八	許 一九	一三・〇
小東庄村	一六四	六	張 四五	二七・四	史 三五	二一・三
趙古營	一二四	一六	姚 三六	二九・三	趙 一九	一五・三
沙井村	七〇	一六	楊 一三	一八・六	張 一二	一七・一
河南村四保	一〇〇	一五	王 四〇	四〇・〇	張 八	八・〇
河南村六保	一〇四	二七	姚 二八	二六・九	李 一四	一三・五
胡各莊	七七	一五	王 二八	三六・四	張 一八	二三・四
石各莊	五五	一八	馬 一六	二九・九	趙 七	一二・七
梅溝營村	五八	一一	劉 四四	七五・九	張 三	五・二
沙坨村	四四	七	焦 二二	五二・三	楊 八	一八・二
泥河村	五五	八	康 二五	四五・五	員 一四	二五・五
杜各莊村	一〇七	一七	李 四〇	三九・三	李 一七	一五・八
北法信村	一三八	二一	徐 五一	三六・九	李 二八	二二・八
劉家河	一五〇	二二	劉 七八	五二・〇	李 一八	一二・〇
衙門村	二七四	三九	王 四五	一六・四	趙 三〇	一九・四
大營村	一八八	三〇	吳 四二	二二・三	郭 二六	一三・二
向陽村	三四四	三三	張 九二	二六・七	趙 四八	一三・九
秦卷村	二五	四	秦 二〇	八〇・〇	郭 二二	八・〇
姚店村	六六	二三	趙 九	一三・六	胡 八八	一二・一
東馬坡村	二三	一〇	劉 一〇	四三・五	蕭 三	一三・〇

100	0	1	1	167
村落合計	五四	一四三	六二	一六七

第三表によると、浙江省奉化県の鄞源郷では一姓を以て一村の戸数の半ば以上を占める村落は、村落総数（一六七カ村）の九割（一四八カ村）に近く、殊に完全な同姓村落は八十カ村に達し村落総数の半に達している。しかも注目されることは鄞源郷の村落内に在っては、一村の境域をこえて近接数村をあげて同姓（同族）の父系血族を以て構成されていることである。例えば鄞源郷の毛姓村落では、恰も「東西南北みな毛」^⑨（三国志周郡伝・仁井田教授「支那身分法史」参照）というが如き類であって、その村落の内部構成が単一の同姓「毛」であるというよりも、同姓（同族）結合が数村の地盤を連ねてその上に形成されていると云えよう。これら同姓の比率の大きい華南地帯の村落構成は、同姓の比率の小さい河北省順義県の村落とは全く対照的な村落構成である。これに対して、河北省定県の場合は多少とも完全な同姓村落を有し、最大姓のもつ傾向も欒城県に類似している。即ち最大姓の戸数が村内の戸数の半に達する村落と半に満たぬ村落との比率は、四割八分（三十カ村）対五割二分（三十二カ村）である。^⑩

右の煩瑣的な数量的比率からも分る通り、華北農村と華中華南村落との間には、同姓（同族）結合には大きな差異が見られる。即ち中国の同族結合は華南村落地帯に強く、華北農村には極めて乏しい。しかし、一概に平均してその結合分布の状態を把握してはならない。

① 私が「同族結合」としないで「同族的結合」とした理由は、恰もマックス・ウェバー教授の社会科学方法論の基礎概念である理想型による類型「資本主義精神」に対して「資本主義の精神」とすると同じ概念の用法である。（拙著「マックス・ウェバーに於ける資本主義の精神の研究」（身延山大学々報第三十二号参）。即ち華北村落の内部組織の型が、それを構成する同族（同姓必ずしも同族ではない）の比重の差によって数個の類型に区分される故である。参考までに、同族結合の構成を類型別してみ

よう。(一)一村一姓(一村一族)の同族村落。(二)二個又は数個の同姓をもって構成される村落。(三)特に多くの戸口を擁する一・二又は数個の同姓(同族)の外に、少数の戸口を擁する一姓乃至諸姓を同時に含み構成される村落。(四)特に大きな戸口を擁する同姓が存在せず、各々少数の戸口を擁する諸姓によって構成される村落などが列挙されよう。

② 華中華南の同族的結合の強弱に關して、ラング女史は広東省・福建省の農村を一九三六年に調査した結果を報告し、同族的結合の強弱の度合を主に祠堂・住宅・店舗・質舗・祭田・菜地・族田などの大小の比によって示しているが、その中で「同族はしだいにその意味を失ないつつある」。「そこでは同族の重要性が減少していることを物語つてゐる」と述べ、従来の華南地帯の農村家族に対する見方をやゝ修正してゐる。(Olga Lang: Chinese Family and Society (1946, Yale University Press.) 小川修訳「中国の家族と社会」(岩波現代叢書)第一卷二二六—二二三頁参照)しかし總体的には華中華南の同族的結合は強い。例えば浙江奉化県の鄞源郷の場合(データは清末のもの)は完全な同姓村落は八十に達し村落總数の半数に及んでいる。

(仁井田教授「中国農村の家村」(一九五四年東大出版会。六七—六八頁、牧野翼氏「中国に於ける家族の村落分布に關する統計的一資料」(家族と村落第二輯。昭和十七年)また D. H. Kuip: Country Life in South China. The Sociology of Familism. 1925. P. 143. によれば、広東省湖安附近の韓江をさかのぼった鳳凰村は殆ど一姓の同族村落であるとされている。

③ 華北村落における同族結合の弱さを示すものとして、例えば郷土志叢書第一集(民国二六年二月燕京大学印行)の陝西省部には「甘泉県では大姓氏族なし。岐山県でも十数代數代を伝える世家大族もないが少く、族譜も信用すべきものが少い。寧光州でもこれと同様の傾向がある。城固県でも一族は多くて数十戸であり江南広東の同族に比すべくもない」とあり、その傾向を知ることができよう。

④ 華北農村の八割程度は農民によって占められるが、中には同一家族内に短工、長工、木匠、苦力、ボーイなどの職業に従い家計を援助する者もあり、或は稀には小学校教員、警官、商人などを生業とする者もある。姓も雑多で本文第一表、第二表を参照されたい。

⑤ 李景漢氏「定県社会概況調査」(民国二二年二月。一六八頁以下)。仁井田教授「中国の農村家族」(昭和二九年十月。東大出版会。六〇頁)同「中国法制史」(昭和二七年。岩波全書。一九〇頁)。

⑥ 欒城県の村落構成表は「中国農村慣行調査」(第三卷二〇頁)の「欒城県第一区各村別姓の種類及其戸數(城内は略く)」(河北省真定道欒城県第一区保甲編成冊による。昭和十七年二月二十六日)とある調査資料を参照した。尚右の資料に誤記が見られるので訂正しておく。即ち資料では「第一区」となっているが第一区は三十数村より構成されるのみであるが、一四三カ村

の構成が示されることから、恐らく全五区百六十カ村（県城内を除く）の資料と思はれる。事実、第一区とある村落名や戸数が「礮城県各區警察所造送一月份戸口統計表」（前掲書第三卷一八頁）と照合した場合にも、二区・三区・四区・五区の各区内に見出されるのである。

また治河南村に關して調査資料では総戸数を二二六戸とあるが、張姓四四戸と諸姓（一五姓）の戸数を合算すれば一〇〇戸足らず、一二六戸とするのが正しいと思はれる。更に寺北柴村の場合、総戸数一四一戸とあるが、前掲資料第三卷の「礮城縣寺北柴村戸別調査集計表」（昭和十七年三月調・五四頁以下）では一四〇戸であり、劉姓二三戸・徐姓二三戸は夫々二一戸と筆者は集計したが、この点はいずれとも判断し兼ねている。尚また、礮城縣村落構成表については福武直氏「中國農村社會の構造」（昭和二年一〇月三七六頁以下）。仁井田教授「中國の農村家族」（昭和九年六〇頁以下）にも同様な発表がなされているが、福武氏の発表には誤記もあるが、仁井田教授によって訂正されている。しかし又、仁井田教授の発表分にも、村名の北関を西関とした如き僅かな誤記が見られる。

⑦ 順義縣村落構成表の作成には「中國農村慣行調査」（第一卷・六〇頁以下）の「河北省順義縣第一區所管村落の姓別戸口数」を参照。

⑧ 四畝村落内最大姓戸数の百分比対照表の作成には、牧野巽氏「中國に於ける家族の村落分布に關する統計的一資料」（家族と村落第二輯昭和十七年）を参照して定畝、村数を算出す。また鄆源鄉村数は、浙江奉化縣鄆源鄉の鄆源鄉志卷四氏族」を参照引用して仁井田教授の作成されたものを参考させて頂いた。

⑨ 毛姓村落に就ては牧野氏前掲書二三四頁以下参照。

⑩ 華北村落でも華中華南と同様に豊かな村落となると同族結合の傾向が強く見られる場合がある。例えば山東省歷城縣冷水溝莊では三百七戸の内に李姓百七十戸、楊姓五十戸、謝姓四十戸があり、李姓が全体の六割一分を占め、楊姓一割六分、謝姓一割三分で、三大姓によって九割強が占められ、同姓（同族）集居の傾向が強い。また河北省昌黎縣侯家宮の調査では（民國三十年の保甲冊による。中國農村慣行調査第五卷五頁参照）同村の戸数は百十四戸、人口六百八十人。侯家宮の名称が示す如く侯姓が最も多く、八十四戸（七三・七％）を占め、劉姓一〇、王姓六となっており、華北農村のいずれよりも、同族的色彩が濃いのである。

これに対し山東省恩縣後夏寨では、戸数百三十戸、總姓數十一、その内王姓五一戸（三割九分）馬姓三十戸（二割四分）吳姓十八戸（一割二分）程度にて、冷水溝莊と對比しても明らかな如く、華北村落の一般に見られる雜姓村落である。また河北省良鄉

県城での調査（中国農村慣行調査第五卷六頁参照）によれば、県城内には多少とも同姓戸数の割合の多い村として張家莊（張姓約二分の一）王家莊（高姓約三分の一）の程度で、河北省南部の饒城縣などに比すれば同族村落のニュアンスは極めてうすい構成である。

三、家族成員と構成の問題

中国家族の成員と構成の論議に関しては、仁井田教授が創見に富む所論を発表されている。^①従来、家族の集団化の問題について、専ら論争点となってきたのは、中国家族の縮小説と非縮小説をめぐっての対立である。^②即ち、縮小説と非縮小説をめぐって、家族成員が五人前後にすぎないとか、累世同居家族が軽視できないとか、という問題点に論争が集中してきたようである。しかし、かかる認識や問題領域にのみふみとどまっていたのでは、研究成果の発展はのぞめない。何故に歴史的に見ても大家族が少いのか、それと関連して大小家族の社会的分布状態が如何に示されるのか、の問題点を知ることこそ中国家族を研究する重要な課題でなければならない。

以下に近來の中国家族の成員とそれの歴史的推移を二・三例示しながら、華北農村との比較に於て問題の焦点をしばってみたい。例えば、李景漢氏が一九二八年河北省定県（の五百十五戸の農家を対象とした農村調査の結果によれば左表の如くである。

河北省定県農家類別と一家平均人口との関係^③

農家類別	〇—九畝	一〇—二九畝	三〇—四九畝	五〇—六九畝	七〇—九九畝	一〇〇畝以上	總計
人口總數	八二三	一・〇七一	五九三	四五三	三九八	二三三	三、五七一
家數	一七四	一六七	七六	四三	三七	一八	五一五
一家平均人口	四・七三	六・四一	七・八〇	一〇・五三	一〇・七六	一二・九四	六・九三

この比較表に於て注意されることは、田産畝数の増加につれて一家庭成员数が増加していく関係である。即ち十畝未満の一家平均人口が四・七三人の程度であるのに対して、百畝以上の一家平均人口は一二・九四人にも達し、また中間層の家族群に在っては、田産畝数の遂増に比例して家族成員数も遂増の傾向を示している。つまり、家族成員数と貧富の間には大体に於て比例関係が成立していることが説明されるのである。

また張履鸞氏に於て行われた一九二六年の江蘇省江寧県四百八十農家調査を参照してみよう。

江蘇省江寧県經濟狀況と一家平均人口との關係 ^④				
經濟狀況	極貧	貧	普通	富
人口總數	一五七	七二	一、四七〇	二九六
家數	三四	一四七	二五三	四六
一家平均人口	四・六	四・八	五・八	六・四
				五・五
				總計
				二、六三四
				四八〇

この調査表に於ても、河北省定県と同様な結果を示している。極貧者の四・六人に対して富裕者が六・四人を占め、両極の間にある家族の大きさも、ほぼ家産の大小に照応した比率を示している。

ここで歴史的に家族成員の統計を参考にしてみよう。勿論中国領土の広大のため現今に於ても精密な人口統計を得ることは至難である。謂んや古代以来の人口統計に精査を期待するのは無理ではあるが、大体の指標を定める参考資料となろう。さて、中国家族の戸口統計は漢代より信頼すべき数値を示しているとされている。いま前漢平帝時代と後漢順帝時代の戸口統計を参照すると、一家平均人口は五人前後となっている。

統計年代	戸數	口數	一戸平均 ^⑤
前漢平帝元始二年	一二、二三三、〇六二	五九、五九四、九七八	四・八七

後漢順帝永和五年

九、六九八、六三〇

四九、一五〇、二二〇

五・〇七⑥

右の如く、一戸平均五人の家族ということは、前述の李景漢、張履鸞兩氏の調査と悉ど同率の数量を示している。

近代と漢代の間には約二十世紀の歴史的隔離があるが、家族成員数に大差を示さないことは、近來の調査及び法制史的研究の立場から考論すれば、家族構成上、父子二代の同居が多いことである。しかも、成員が五人を越えない為には、父子あるときの生分（一面識もない意。転じて他家に面識をもつこと、即ち家産をもって独立した一家を構成することである。漢書地理志が最初の出典で、家産分割に於ける一方法で、出分ともいう。）・売子・殺子・贅子（子供を奴婢に売ること）などによる人為的制限、或は餓死や早死による自然的減少、戦乱による災厄がその制限の条件となろう。

次に唐宋時代の戸口統計を参照してみよう。

統計年代	戸数	口数	一戸平均
唐玄宗開元二八年	八、四一二、八七一	四八、四四三、六〇九	五・七二⑦
玄宗天宝一四年	八、九一四、七〇九	五二、九一九、三〇九	五・九六⑧
宋仁宗天聖七年	一〇、一六二、六八九	二六、〇五四、二三八	二・五六⑨
神宗熙寧一〇年	一四、二四五、二七〇	三〇、八〇七、二一一	二・一六⑩

右表によると、漢代に比較して前二者はやく多く、後二者は著しく少くなっている。もしこの平均家族数を額面通りに受取るならば、農村家族の三世同居以上の累世同居の困難性を想像しうるのである。惟うに、中国家族の縮小は孟子の井田学説に萌芽し爾來、小型家族は秦漢時代を経過し、その傾向は近世清末に及んだと推定されるのである。併し又、この歴史的過程を通して、士大夫を中心とする官僚乃至富裕者の上層階級を中心として、大家族制が発達し

ていたことも否定できない事実である。従つて、人口統計の示す数量が大家族をも含めて五人前後の家族成員を示すことは、中国家族の構成が如何に極富と極貧の差があつたかを、社会的分布状態のうえから示唆されるのである。

次に金代より明代までの戸口統計を参照すれば、左表の如くで、漢・唐・宋時代と大差がない。

統計年代	戸数	口数	一戸平均
金世宗大定二七年	六、七八九、四四九	四四、七〇五、〇八六	六・五八 ^①
章宗泰和七年	七、六八四、四三八	四五、八一六、〇七九	五・九六 ^②
元世祖至元二年	一三、一九六、二〇六	五八、八三四、七一一	四・四六 ^③
明太祖洪武三五年	一〇、六二六、七七九	五六、三〇一、〇二六	五・三〇 ^④
孝宗弘治一五年	九、六九一、五四八	六一、四一六、三七五	六・三四 ^⑤

以上歴史的に考察した結果、概略的ではあるが小型家族が傾向的であることを認められよう。併しかかる統計表によつては、小型家族と大型家族との比較対照ができない。更に社会的分布状態（社会構成）のうえから考察を進める為には、より精査な調査表を必要とするであらう。

さて小型家族が歴史的に傾向的であつたとしても、その間、三・四世同居程度の大型家族も存在したことは事実であり、近代に至つても、ことに解放前後にも相当高い比率をもつて存在していたことは注意されよう。即ち、李景漢氏の一九三〇年の河北省定県五二五五戸調査の結果では、一家族十六人以上が百五戸、二十一人以上が三十七戸、三十人以上が五戸、最大六十五人が一戸の数量を示し、大型家族の存在を実証している。またバック氏の七省十六地域にわたる二・六四〇戸の広範圍の調査では左表の如くなっている。

七省十六地方農家家族の度数分布表^⑩

一家人口	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三
家数	五七	一五一	三〇四	四四九	五三八	三八二	二四六	一八四	九五	八二	四九	三一	二二
百分比	二・六五	七・二一	五・一七	〇・〇二	三・八一	四・四七	九・三二	六・九七	三・五九	三・一〇	一・八六	一・一七	〇・八三
一家人口	一四	一五	一六	一七	一八	二一	二二	二四	二五	二七	二八	二九	総計家数
家数	一八	六	一一	四	三	二	一	一	一	一	一	一	二、六四〇
百分比	〇・六八	〇・二三	〇・四二	〇・一五	〇・一一	〇・〇八	〇・〇四	〇・〇四	〇・〇四	〇・〇四	〇・〇四	〇・〇四	一・〇〇

此表から得られる統計的意味は、戸数の最多なるものは五人家族（二〇・三八％）であり、四人家族（一七・〇〇％）と六人家族（一四・四七％）がそれに続き、この三大家族によって総戸数二、六四〇戸の内一三六九戸（五一・八五％）を占めていることである。既に述べたつた如く、中国家族の構成上には貧富と成員数の間には比例関係があることが、またその関係は古代より近代に至るまでの歴史的形態であることも、右表のうえから指摘することができる。

さて以上の統計資料を通して考察した範囲で云い得ることは、単純に家族分裂の傾向や家族成員数のうえからのみ観るならば、大家族制度の解体は近來に始まったものではなく、二千年前の孟子の井田学説以来、家族分裂の萌芽は見られるのであり、旧中国農村の社会に在つて十口以上の大型家族が支配的であつたとは云い難いのである。従つて今更ここで、崩壊とか解体ということ自体に疑問を抱くもので、一家六人、五人、四人程度の小型家族は近代家族どころか古代家族型とさえ云い得るのではなからうか。さすれば、中国家族の縮小説と非縮小説をめぐる論争点は、観点の転回をはかることによって、中国家族制度のより漸新的研究への道が開拓されるのではなからうか。^⑪

前来、煩瑣にすぎるほどに統計資料と調査結果を参照してきたが、解放前夜の華北農村の家族成員の実態を單に統計的観点からみた場合には、結論的に云って前来と同様な調査報告がなされている。⁽¹⁸⁾併しこれを社会構成的に考察した場合には、一家族数名の小型家族であっても、夫婦と未婚子女のみの所謂近代型家族は稀れであって、多くはその内に祖父母を含み、又は傍系親をも含むことが珍しくないのである。⁽¹⁹⁾（日本の農村に数多く見られる家族構成と全く同じである）。従って、小型家族であるからといって、夫婦と未婚子女のみの婚姻群とは限らないのである。労働構成・扶養者関係などの構造的に動態的に捉えるならば、小型家族と云えども、そこには大型家族と共通する複合的家族（大家族の性格）を見出すのである。⁽²⁰⁾大家族とか小家族（Grosfamilie, Kleinfamilie 独）を論議する場合には、家族成員数の立場から見るべきではなく、家族構成の複合的関係と職能、それを成立せしめている社会的第件を考察に加味せねばならない。また、家族成員数が多いからと云って、必ずしも富戸とは限らないことは、華北農村の一特色でもある。

さて華北農村の実態調査にも先に述べたような意味で、三世、四世同居。家口数の二十、三十、四十に及ぶ大型家族が往々見出されるのである。以下にその実態を考察しよう。

第一表 河北省樂城県寺北柴村の家族成員と戸数対比表⁽²¹⁾

一家人口	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	計
戸数	六	二一	一九	一五	二二	一一	一三	八	七	三	二	一	二	三	一	一三五
百分比	四・四	一五・〇	一四・〇	一一・〇	一七・〇	八・〇	九・〇	六・〇	五・〇	二・〇	一・五	一・〇	一・五	二・〇	一・〇	一〇〇・〇

第二表 河北省順義県沙井村の家族成員と戸数対比表⁽²²⁾

一家人口	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一七	一八	計
戸数	二	八	八	九	一二	九	八	三	二	二	一	一	一			六八
百分比	三・〇	一二・〇	一二・〇	一三・〇	一七・〇	一三・〇	一二・〇	四・〇	三・〇	三・〇	三・〇	一・三	一・三	一・三	一・〇	〇・〇

第三表 山東省恩県後夏寨の家族成員と戸数対比表⁽²³⁾

一家人口	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一四	計
戸数	五	一一	一二	二六	二五	一六	一一	七	一	三	七	三	三	一二七
百分比	四・〇	八・〇	一〇・〇	二〇・〇	一九・〇	一二・〇	八・〇	五・四	一・〇	二・三	五・四	二・三	一〇・〇	〇・〇

右の対比表のうち、第一表の樂城県は華北農村地帯としては、同族的結合が割合に強いという、社会構成上の特色をもっているが、(前節参照)対比表に示される度数では、同族的結合の比率がそのまま家族の大小に反映しているとは云えない。⁽²⁴⁾のみならず、解放前夜の華北農村に在ても、四・五人程度の小型家族が圧倒的ではなく、十口未満の家族が割合に高い率を示している。これは華北農村地帯の経済的貧困のために小型家族への傾向を示しているのかも知れない。しかし十口以上の大型家族の存在も報告されていることから考えると、大小の家族型を決定する要因が家族構成の内部にひそんでいるようである。

このような大型家族の存在を前提としながら、家族構成の内部に立入って考察をすすめてみたい。河北省順義県の楊各莊鎮の家では「三十人位は可成ある。最大は四十人位」それには「代々農業をしている家多し。商人の場合は家族は少い」(山本氏調査)⁽²⁵⁾。また順義県張喜莊では、二百六十戸中に張姓約九十戸を占め「張家で大家族の家は二十名位。分家は昔に比べると近年多くなったが、特に事変後多くなったとは思われぬ」(山本氏調査)⁽²⁶⁾というのである。

河北省樂亭県吉祥寺郷では、王郷長の家は四十余人、張某氏の家は三十余人、張保長の家は四代同居二十余人からな

り、十人以上の家も「非常に多い」と報告されている。(安藤鎮正氏調査)更に河北省樂城県の「南陳村の張老雅の家は四十人以上」(杉之原氏調査)²⁷⁾と報告されている。

さて右の調査報告と先の三つの対比較から大家族の存在を前提した場合、二つの問題が抽出されるであろう。第一の問題は、大家族が必ずしも富戸(財産家)とは限らないことである例えば「家族の多いのは郝姓約三十人、特に有錢的に非ず」と順義縣臨河村々長は答えているが、他にも同様な報告が数多くなされている。即ち、富戸に非ずして大家族が形成されていることは、そこに経済的貧困(損失)を補填するに足る家族労働の継続が主眼となっていると考えられる。²⁸⁾例えば婚姻にしても家族労働者を得るが為の結婚であったり、また離婚が夫権によって自由に可能であったにも拘らず、妻を逐出せばその場から生活に困る程の農村家族に在っては、労働力維持が重要な関心事であつたし、それが家族的秩序を支えている支柱でもあったと考えられる。

第二の問題として、いま見た如く家族労働を維持するが為の家族構成であるならば、大家族であつたとしても分家(家産分割。家族分裂とも呼ぶ)はあり得ないか。また富戸であつても分家はしないか。更に推して考えるのに、かえって貧農なればこそ一家族の経済的消費を最小限にいとめる為の手段として分家を行わないか。と云うことである。しかし「分家は昔に比べると近年多くなったが、特に事変後多くなったとは思われぬ」(前出山本氏調査)の如く解放前夜の華北農村地帯の家族分裂の傾向は顕著ではなく、寧ろ否定的でさえある。即ち山東省恩県の農民は「事変後とくに多くなったということはないか」の問に対して「関係なし」と答へ、稀に分裂傾向が著しくなったかの如き印象を与える調査報告があつたとしても、それを過大視することは妥当を欠くであろう。事実山東省歷城縣冷水溝莊では「昔も今三百戸位で家もそう多くない」(内田氏調査)²⁹⁾とあり、旧來の理解と知識をもって中国家族の、ことに華北

農村の大家族が急速に崩壊過程にあると論断すとはできない。

しかし又、中国家族の構造上の特異性からして、院子（垣を周囲に繞らした地所・庭）を共同にして累世同居の型をとるならば、分家しても村落総戸数の増加は見られない。河北省良鄉県吳店村の調査で「保甲簿により自然村としての吳店村に於て十人以上の家族員を擁する者は楊文海・李永治各十人。禹明・裴振明・劉謙十八人。禹裕二十人であるが、實際は劉財・郭樹・賈生・禹欽・禹裕・いずれも既に早く分家し、ただ院子を共同にして住んでいるため一戸と扱われているのである」^{②③}とあり、院子を共同にする限り分家しても戸数の増加は見られないが、実質的には家産分割が行われているのである。

勿論、華北農村と云っても、極めて広大な地帯であるので、地域差や家族構成の相異、或は匪賊などの襲撃から被害を最少限にくいとめる為などによって、分裂の進行速度には遅速が見られることは当然考えられるところである。ともかく、家族分裂の傾向は、平面的、直線的に見るべきではなく、種々の条件を考慮しながら曲線的、循環的に、更には螺旋的にこれを考察すべきであろう。人間の営む複雑な社会集団の研究であるから、立体的な領域から掘下げていくことが肝要であろう。

① 仁井田陞教授「中国農村の家族」（昭和二十七年。東大出版会。九五——一〇三頁）

② 中国家族の縮小説、非縮小説をめぐる代表的文献のみを指摘しておく。先づ縮小説の代表者に加藤常賢博士「支那古代家族制度研究」（五七三——五七六頁）。陶希聖氏「支那に於ける婚姻及家族史」（天野元之助訳。四頁）。これに対して非縮小説には牧野巽博士「支那に於ける家族制度」（岩波講座。東洋思潮。一〇——一三頁）。桑原隲蔵博士「支那法制史論叢」（一五七——一六二頁）がある。この間にあって仁井田陞博士「唐宋法律文書の研究」（五四四——五六五頁）は儀礼喪服伝をはじめ上は周漢史料にさかのぼり、下は明清史料に至るまで広く論証をすゝめ、中国家族の共産範圍が父子祖孫に及ぶことを論じ、またこの形態は立法家乃至法律註釈家のあらかじめ前提としたものであることを立証されている。仁井田教授の所論は中国家族発

展の傾向について何ら触れるところがないにも拘らず、大家族の軽視すべからざる所以を豊富な史料によって論断された点は中国家族制の研究者に強い示唆を与える。筆者も仁井田教授の所論から多大の教示を受けた。尚、縮小説・非縮小説をめぐる論議に関しては、清水盛光博士「支那家族の構造」(一一〇——一一三頁)に概略されている。

③ 李景漢氏「五百十五農村家庭之研究」(社会学界)第五卷六月号・四六頁。

④ 張履鸞氏「江寧縣四百八十一家人口調査的研究」(中国人口問題・中国社会学社編輯)三〇七頁——四八一戸の内、一戸は調査中に選出した。

⑤ 前漢書卷二十八下。地理志第八下。

⑥ 後漢書卷三十三。郡国志第二十三ノ五。

⑦ 旧唐書卷三十八志第十八。地理一。

⑧ 杜佑、通典卷七。食貨七。歷代盛衰戸口。

⑨ 馬端臨、文獻通考卷第十一、戸口考二。

⑩ 宋史卷八十五、志第三十八、地理一。

唐宋時代の戸口統計を見て問題となるのは、唐代に比べて人口が大きく減少していることである。その原因として、玄宗皇帝代の安祿山の叛乱(七五五)。次で史恩明の反乱(七五六)によって唐帝国の基礎であった均田制や租調役制が崩れ、農民が戸籍を離れて大土地所有者の下に陰れたこと。更には黄巢の乱(八七四—八八四)による唐の滅亡。華北では短命な五代諸国の興亡(九〇七—九七六)によって、荘園制の発達と新興大土地所有者があらわれ、戸口調査が、彼等によってまたげられた為と思われる。

⑪ 金史卷四十六、志第二十七、食貨一。

⑫ 王圻、續文獻通考卷五十九、戸口考。

⑬ 前掲、卷之二十、戸口考。

⑭ 圖書編第九十卷、国朝民数総叙。

⑮ 李景漢氏「農村家庭人口統計的分析」社会科学、第二卷第一期八〇頁。

李景漢氏調査の河北省定県は華北地帯としては同族的結合が強く(前節参)共同始祖をもつ同族性の強さは、同族構成にも比例関係し、大家族を形成しているようである。

⑬ バック「支那農家經濟研究」下卷（東亞經濟調查局訳四六八・四七〇頁）

バックの調査した地域は次の七省十六県である。安徽省（懷遠・宿・來安・蕪湖）・直隸省（平郷・塩山）・河南省（新鄭・開封）・山西省（武郷）・浙江省（鎮海）・福建省（連江）・江蘇省（江甯・武進）この中塩山県と江甯県は再調査されている。

⑭ 筆者の主張したいことは、旧來中国家族の構成として大型家族が支配的であつた如く理解されてきたことに對して、反省を求めると同時に、二千年前の孟子の井田學說以來（孟子滕文公章句上）秦・漢・南北朝・唐・宋・明・清そして近代に至るまで小型家族が支配的であつたことは、大型家族の崩壊とか分裂（家産分割）を論議すること自体意味が少い。それよりも、やゝもすれば大型家族の傾向をとりがちな中国家族が、如何にして五人前後の小型家族が支配的となつたか。と云う問題を中国社会のつ社會構造の特質と併せて理解することこそ重要な意味があろう。

旧中国社会の生活様式から云えば、大型家族の中にも貧農の例がないではない。しかし大体は官吏や地主などの生活富裕者の生活様式が傾向的である。又、小型家族の中にも富者を含むことはあつても、大部分は貧農の生活様式が傾向的である。例えば家族を小型化（家産分割）ならしめても、開墾なり出稼なりできるどころでは、富者に於けると同様に、貧農に於ても家族分裂の可能性は多分にあるのである。

⑮ 華北農村慣行調査に基き筆者が作成した結果を例示しておく。

河北省順義縣沙井村戸口統計

戸数（七〇） 口数（男一九三・女二一四・計四〇七） 一戸平均（五・八）

河北省順義縣大東庄村戸口統計

戸数（一四六） 口数（男四三〇・女四三八・計八六八） 一戸平均（五・九）

右表は「中国農村慣行調査」（岩波書店第一卷）六〇——七二頁併せて卷末附表の「順義縣沙井村戸別調査集計表」（民國三十年十月三十一日現在）を参照して筆者が算出したもの。

また華北農村でも同族結合が強いと思われる河北省樂城縣の調査を見よう。

河北省樂城縣第一區西大街村戸口統計

戸数（四〇三） 口数（男一〇〇三・女九三八・計一九四一） 一戸平均（四・八）

河北省樂城縣第二區三十一家村戸口統計

戸数（四・〇三九） 口数（男一二・一五三・女一〇・九九八・計二三・一五一） 一戸平均（五・七）

河北省樂城縣第五區三十一家村戶口統計

戶數(四、七三六) 口數(男一四、一五三・女一三、一八三。計二七、三三六) 一戸平均(五・七)

樂城縣の統計は「中國農村慣行調査」第三卷一八頁所收「樂城縣各區警察所造送一月戶口統計表。民國三十一年一月二十九日現在」より筆者が算出作成したもの。——統計數量のうえからは、華北農村地帯は小型家族が大部分を占めていることが知られる。

①⑨ 近代家族(modern family) この概念は歴史的形態上、家父長制家族に対するもので、權威主義的家族に対する民主主義的家族・家族主義的家族に対する個人主義的家族であつて、形態からすれば夫婦と未婚の子女のみからなる所謂家族的核(familistic nuclear)だけの家族であり、家族成員からいっても小規模である。ここでは家族を構成している社會關係の中心が親子關係ではなく、むしろ夫婦關係におかれ、相互の愛情に基礎をおく結びつきをなしている。その特徴は結合が制度的に社會的壓力を受けることがない。愛情と合意に基く配偶者の選択・結婚後の親子別居・夫婦平等の原則・家族會議の尊重・最大限の個人の自由なのである。しかし反面、純粹に個人的愛情と意志による為に、離婚率も高い。

②⑩ 拙著「中國農村に於ける法意識の變革」(身延山短大學報三十一号・七六——七七頁)。中國農村の家族的秩序を支えているのは家父長的構成であるが、その家族の從屬關係(身分的法律關係)は家長と家族(父と子・妻・娘・養子・婿)の間に、多分に勞働力の継続的把握、又はその支配をねらつて規律だてられた諸關係がある。

②⑪ 「中國農村慣行調査」第三卷五二五——五三三頁。別表「樂城縣寺北柴村戶別調查集計表」(昭和十七年三月・民國三十一年)を参照して筆者が作成した対比表・寺北柴村の總戶數は一四〇戸であるが、調査に當つて、劉德元・徐歪子・徐福玉の三戸は不明。徐侯氏は村外に嫁して不在。劉洛玉は老衰し言語不明にて結局一三五戸が實態調査の對象となる。

②⑫ 「中國農村慣行調査」第一卷六〇——七二頁。及び別表「順義縣沙井村戶別調查集計表」(民國三十年十月三十一日現在)を参照して筆者が作成す。

②⑬ 「中國農村慣行調査」第五卷、五五七——五六三頁。及び別表「山東省恩縣後夏寨戶別調查表」(昭和十七年五月——六月)を参照して筆者が作成す。調查戶數中不明四戸——李存義・魏劉氏・劉長福・孟非公がある。

②⑭ 同族的結合の大小と家族成員との關係の一例として、山東省歷城縣冷水溝莊は三百七十戸内・李姓一七〇戸。楊姓五十戸。謝姓四十戸を占め、同族結合が強いが、そのまま大家族へと連るかと云えば、そうではなく、「保甲簿を見ると二人三人四人くらの家族が多いが、これは分家したもの——三人・四人が普通である」(中國農村慣行調査四卷五七頁)と報告されている。

②⑤ 山本斌氏調査「中国農村慣行調査」第一卷二頁參照。

②⑥ 山本斌氏調査前掲書十六頁。また順義県第七区牛欄山鎮では「事変前では二十名近くあった家が二・三十戸あったが、事変後は土匪を恐れ分家するため今では多い家族の家なし。……事変前の大家族の家は商農又は昔の秀才の出た家等に拘らず、又富貧に拘らず、仲が良い家は人が多った」(前掲書一卷二十九頁)と報告している。

②⑦ 杉之原舜一氏調査。前掲書第三卷七頁。(昭和十七年二月二十六日)參照。

②⑧ 順義県第四区臨河村(山本氏調査)。前掲書第一卷三十七頁。大家族と富貧との関連について、「家族の多い家は概して富戸か——必ずしも然らず。不一定」(順義県紅寺村。山本氏調査。第一卷六頁)「大家族は二十一・二名、それは必ずしも富戸と限らず、家庭内の感情のよき家」(山本氏・第一卷二十頁)。ともある。

②⑨ 拙書「中国農村に於ける法意識の変革」(身延山短大学報第三十一号七七頁以下)家族労働力を維持するための婚姻・離婚の意義を華北農村の実態調査から例示してある。

③⑩ 内田智雄氏調査。山東省恩県後夏寨(昭和十七年五月三十日。前掲書第四卷四五二頁)

③⑪ 河北省順義県沙井村(本田・小沼両氏調査)「分家は最近多くなった。父母が死んだら殆どする」と答えているが、「父母が死んだら」と云うのは「父母生前に」と云う答えではなく、殊に同地に於て内田智雄氏の調査で別の農民に分家の多少を聞いた所が「少い」と答えている。又同県回回宮(回教徒部落)で山本氏調査でも「近年分家は多からず」となっている。

③⑫ 内田智雄氏調査。山東省歷城縣冷水溝莊(前掲書第四卷五十七頁)

③⑬ 早川保氏調査。前掲書第五卷四六二頁。

四、結語と今後の研究課題

中国の同族と家族との相互関係は中国社会を理解する基本線の一つである。筆者は——その構造的、社会的条件に深く立入り論議する所は少なかったが——或る程度その理解につとめてきた。

従来、中国の血縁主義(族的結合)は極めて強力と理解されてきたが、同族的結合が大とされた華中華南でさえ

も、絶対的な大きさは示していない。とりわけ華北農村に在っては——数量的分布状態は——極めて弱い結果を示している。

また同族（宗族）集団の底辺には個々の家族があるが、筆者は統計的に見て、近年にわかに大型家族から小型家族への変化——家族制度の崩壊説——には否定的立場を主張したい。かえって井田学説以来、二千年来小型家族が数量的に支配的であったことを指摘したい。

さて前節来の外形的、数量的考察からは、大略の概観は捉え得ても、中国家族の実態と構造を把握することは難しい。そこに筆者自身、今後に残された幾つかの課題があるが、前来之の数量的研究に関連して問題を掘り下げて考えてみたい。

第一節に於て、華北農村の同族的結合力の弱さを数量的に把握したが、しかし、その結合力の弱さが何故に傾向的であるのか、の問題にはふれなかった。惟うに同族結集力の強弱は、族長の支配権と対応的であると考えられるが、決定的な要因は族産の多寡と結合意識との関係であろう。即ち同族結集機能としての族産（祭田又は護墜地・義莊・義田・學田・塾田・族田・族譜又は宗譜）が同族結合力の強弱を左右すると考えられるが——勿論、華北に在っても族田が零細で族譜がなくとも、河北省欒城縣寺北柴村の如く結合力と族長權威の強い地域もあるが——族産は同族結集力の内部から出来上ったものであり、これらが同祖同族意識（同族規範）を呼び起し、同族結集の機能を果すことよって、循環的にその結果度を強める傾向があることは否めない。つまり、華北農村に於ける同族的結合力の考察も、単に数量的立場のみではなく、機能的な立場（同族規範）から考察をすすめることが重要であろう。

また大型家族とか小型家族と云っても、単に数量的立場からすれば、そこに累世同居（大型）と近代家族（小型）

を予想し勝ちであるが、しかし質的区分に立入って考察するならば、大型とか小型の両者の限界は難しい。即ち、クラインファミリエ (Kleinfamilie) と云っても、家族構成が必ずしも夫婦とか、夫婦とその未成年の子女に限られてはいない。——よしんば家族構成に於て夫婦とか、夫婦と未婚の子女からなる家族構成であったとしても——社会的条件の如何によつては大型化になる要因を含んでいる。しかも小型のものだけが近代性があるとか、大型のものが近代性がない、ということも出来ない。例えば老人夫婦の場合など、数量的に成員数から見たのでは、単一夫婦を基本とするクラインファミリエと区別がつかないのと同型である。

また家族分裂（分割）は単に財産を分けるばかりでなく、普通には住居を分けて経済生活は分離する。家族分裂によつて、従前までの同居同財、同居同爨の生活共同体は一応終焉を告げるのであるから——我が国の家分族裂から云えば、経済単位と戸籍を異にする二家族が生れるのであるが——新しい一家族が分離形成されるわけである。しかし中国家族の場合、院子を共同にすることが多く、家産分割しても村落全体の戸数上には増減が見られない。即ち数量的考察では家族分裂の実態を捉えることは難しく、ここに中国家族の特異性を汲みとることが出来る。大型家族を一方にもちつつも、小型家族が二千年來の古くから支配的であつたことは、家族分裂の頻度が統計的に示されるけれども、統計数字のみでは、家族分裂の形式（均分主義が多い）とか、家族相互間の関係の実態を全構造的に把握し難いのである。

（37・2・20）——史字会々員——

『追記』本論文に引用した資料は華北農村実態調査を主体とするが、筆者の怠慢から、その一部のみを参照するに止まつた。また統計表の統計数字と算術平均の算出は、妻紀之代の労を煩した。記して感謝の意を表す。